

2018年4月4日

## 平成30年度入学式告辞

九州工業大学 学長

尾家祐二

ご入学おめでとうございます。

春爛漫の今日、ここに入学式を挙げるにあたり、栄えあるこの日を迎えられました皆さんに、心からお祝いを申し上げます。そして、これまでのご努力に敬意を表します。九州工業大学に皆さんを迎えることができましたことは、この上ない喜びであります。御列席の御家族の皆様におかれましても、お喜びのことと拝察致します。教職員を代表してお祝い申し上げます。

これから皆さんが学ばれる九州工業大学は、1909年に開校した私立明治専門学校を前身としています。創立者は、安川敬一郎氏です。わが国の産業の礎となった北九州及び筑豊地域で安川電機の設立など様々な産業を興された経済界の重鎮です。

明治時代の日本は、産業面、経済面において、当時の世界の大国からは、大きく遅れをとっていたため、国家を支える人材育成が必要でした。安川先生は、「国家によって得た利益は国家のために使うべきである。」という信念から巨額の私財を投じ、我が国の産業の振興を支える技術者を育成する明治専門学校を創設されました。

安川先生は明治専門学校の教育と研究を、東京帝国大学総長であられた山川健次郎先生に託されました。山川先生は、開校式において、明治専門学校を「技術ニ通ジテイルジェントルマンヲ養成スル学校デアル」と宣言され、品格と創造性をもつ人材を輩出することを目指されました。この山川先生の志は、「技術に堪能なる士君子」の養成という本学の建学の理念として、100年以上の歴史を越えて脈々と伝えられ、現在に至っています。新入生の諸君は「技術に堪能なる士君子」という言葉をこの場で覚えて頂きたいと思います。

明治専門学校は、その後1949年に国立九州工業大学となり、2004年から国立大学法人

九州工業大学となりました。この間に、飯塚市に情報工学部、北九州市若松の北九州学術研究都市に大学院生命体工学研究科を設置し、2学部3学府・研究科、学生数約5700名を擁する、わが国有数の個性豊かな工学系大学となり、現在に至っています。

それでは、この機会に、これから入学後に、大学もしくは大学院において学び続けるうえで大事な二つのことについてお話をしたいと思います。それは、想像力と共感に関することです。

最初は想像力に関するお話です。今や、AI（人工知能）が様々な分野に活用され、私達の働きかたや社会活動にも大きな影響を及ぼすと言われていています。AIを動かしている今の計算機の原型ともなる、最初の電子式の汎用計算機ENIACが米国ペンシルベニア大学で開発されたのは1940年代で、今から70年ほど前のことです。その計算機の基本的な仕組み作りに大きな影響を与えたのは英国のアラン・チューリングでした。彼の伝記が「イミテーション・ゲーム」というタイトルで2014年に映画化されましたので、ご覧になった方もいるかもしれません。現在の計算機は、彼の計算機科学者としての偉大な功績によるものです。そのチューリングは、まだ、計算機の黎明期の1950年において早くも人工知能について考察し、「計算機と知性」というタイトルの論文の中で次のように述べています。(Alan Turing, "Computing Machinery and Intelligence," Mind 49, pp.433-460, 1950、高橋昌一郎著「ノイマン・ゲーデル・チューリング」(筑摩選書)から引用)

「機械は考えることができるか？」という問題を考察してみよう。そのためには、「機械」と「考える」という言葉の意味を定義することから始めるべきであろう。

私たちは、いつの日か、機械が純粋に知的な領域で人間と競争するようになることを望んでいる。けれども、何から始めるべきなのだろう？これはかなり難しい決定である。多くの人々は、例えば、チェスをするような非常に抽象的な概念から始めるのが最善だと考えている。

恐るべき想像力です。いまでは、AIが囲碁、将棋の世界トップレベルの棋士と対戦し、勝利したことなどが話題になりますが、60年以上も前に、産声をあげたばかりの計算機の

未来を、このように想像した人達がいたことは大変な驚きです。想像することの出発点は、対象となるものや状況への強い関心もしくは知的好奇心です。そして、その想像により理解も深まります。想像するためには、多くの知識、知恵が必要です。書籍、経験および他者から多くの知識、考え方を学ぶことは大変大切です。皆さんには、是非知的好奇心をもって、多くを学び、豊かな想像力を養ってほしいと思います。

もう一つ大切なことは共感することです。マクニールはその著「世界史」(中公文庫)において、人の歴史の出発点を、まさに、文化によって進化が遂げられはじめた時としています。そして、私たちは、「人が社会の中で学んだものの力によってはるかに律せられるようになった」ことによって文化的に進化してきました。私たちは、社会の中で学び、成長してきたのです。これに関連して、ここで、もう一つ紹介したいことは、私たちの脳の働きです。私たちの脳には、他人の行為のシミュレーションによってその行為の意味や意図の理解に深く関与する、ミラーニューロンという細胞があるそうです。マルコ・イアコポーニの著である「ミラーニューロンの発見」(早川書房：原著「Mirroring People – The new science of how we can connect with others」)において「自分ではない別の誰かが苦悩や苦痛にさいなまれているのを目にすると、ミラーニューロンが働いて私たちにその表情を読み取らせ、他人の苦悩や苦痛をそのとおりに感じさせる」と紹介しています。そして、「共感私たちの社会生活に根本的な役割を果たしている。共感の力によって、私たちは感情や経験や要望や目標を共有できる」と述べています。共感することは、社会で学び、成長するためにも大事な要素です。だからこそ、私たちの脳はそれを助けてくれているのでしょう。さらには、これから皆さんが学ぶ技術が社会で活用され、浸透するためには、それらの技術が人々に理解され、共感を持って受け入れられることが必要になることも理解してください。

本学では、正課の教室における学習以外に、様々な学習の機会を提供しています。全く異なった環境において感じ、考え、学ぶ機会を提供するために、海外研修を積極的に推進しています。昨年度はおよそ 600 名の仲間がそのような体験をしています。異なる文化を受容する、異なる意見を受け入れ、自分の意見を伝えるなど、皆さんが、グローバル化した社会の中で、専門的な知識やスキルを活かし続けるための能力を身につけて欲しいと考えていま

す。さらに、正課外の学習として、皆さんがチームを作り、ものづくりを企画立案し提案することができる学生プロジェクトもあります。審査で合格すると、本学と本学同窓会である明専会殿等から資金援助を行います。学生諸君がロボット、車、ロケットなどの製作に取り組んでいます。様々な知識を有機的に繋げ、問題を解決する能力が養われます。皆さんには、このような学習機会を是非活用して欲しいと思います。

最後となりましたが、チューリングは、先ほど紹介しました論文の中で、「私たちは、ほんの少し前の未来しか見渡せない。しかし、私たちが試みなければならないことがたくさんあることは、明らかである」と述べています。入学された皆さんが、健康に十分留意され、知を好む人たちが集まる場所であるこの大学で、様々な学習機会と環境を活用し、様々な事を試み、意義ある大学生活もしくは大学院生活を過ごされますことを重ねて希望致しまして、告辞と致します。本日は誠におめでとうございます。